

名軍師 黒田官兵衛 「名語録」

講談師 一龍斎貞花

名軍師黒田官兵衛、その語録から
もリーダーとしても優秀であったこと
とがわかる。トップはどうあるべき
か。番外編としてご紹介。参考にな
れば幸いです。

「草履片々、木履片々」

強敵毛利と対峙し、備中高松城水
攻めの最中、明智光秀の謀反により
織田信長横死。泣き叫ぶ秀吉に、「さ
てさて天の加護を得させ給ひ、もは
や御心のままに成たり」。

天下を取る好機に恵まれました。

今こそ立ち上がるべきですと進言。

仰天の中で事態をすばやく読み取る
判断力。この語録は倅長政への遺言

といわれるが、片足は草履、片足は

下駄をつっかけるほど大慌ての時に

も、すばやく判断して駆け出さねば

ならぬ時がある。優柔不断ではいけ

ない、勝負しなければいかんと、後

継者に言ったのでしよう。

「大将は、威といふものなくては万
民の押へ成りがたし。威嚴の在り方
を間違ひ、万民に恐れられることと
考え、いつも荒々しく振る舞うと、
かえって政道の邪魔になる」

俺は偉いんだと、ふんぞり返って

いたら、表面はへいこらしながら、

内心反発の恐れあります。威を間違

えないことが肝要。

「武勳を専にして一人の働をつとむ

るは匹夫の勇なり、国主武将の武道

にあらず」

営業自慢のトップにありがちです

ね。九死に一生、乱戦の中ならいざ

知らず、部下を適材適所に配置して

総合力で企業を動かす。

「乱世に文を捨てざれば軍理整わず、

制度や法定まらずして、たとえ一旦

は軍に勝つことありと雖も、後には

必ず亡るものなり」

規則や決まりを守らずして、成績
を上げて、後にはそのことがマイ
ナスになって苦しむことがある。決
まりは守らなければいけない。

「金銀は用ゆべき時に用いずば

石瓦に劣れり」

儉約家、けちともいわれたが、無

用な出費をさけ、暮しに困っている者に惜しむことなく金銀を与え、ぜいたくをせず、蓄えた金で武具を整え出陣に備えた。無駄なことに金をつぎ込み、ここぞの時に出し惜んではいけませんね。大事な時に使わないうんだからと、社員の声が聞こえます。

「天神の罰より君の罰恐るべし、君の罰より臣下・百姓の罰恐るべし」

神の罰は折れば許される、主君の罰は、謝れば許されることがあるが、家来や領民にそっぽをむかれたら取り返しがつかず、国を失うことになるぞと、いましめの言葉。

今も、社員を大切にすることは栄えるといわれます。社員を酷使する会社はブラック企業と汚名を受けます。家臣・領民を大切にしたら大名は、今も名君といわれている。その代表は、蒲生氏郷とわたしは思っています。企業でも、何代目は名社長だったと語られる人が少なくない。苦しい時ほど手腕によって名を残すチャ

ンスです。拙稿をお読み頂いているあなたも、名社長と後世に名を残して下さい。

軍師の条件

- 一、知略縦横
- 一、陰の存在
- 一、トップとの信頼関係
- 一、高い俸禄を望まない
- 一、機密保持

歴史上、三軍師といわれるのが、武田信玄の軍師山本勘介

豊臣秀吉の軍師竹中半兵衛

豊臣秀吉の軍師黒田官兵衛

秀吉は名軍師二人を有した。右の

条件を総てといてよいほど備えているのは半兵衛であろう。半兵衛は、病身で無欲。官兵衛は、頑強で野心家でもあった。信長が討たれた時、秀吉に「今こそ天下取りに」と言った言葉から、秀吉は官兵衛の内なる心を見抜き、高禄をなかなか与えなかった。秀吉「きあと家康に従い、関ヶ原合戦が長引けば、兵を率いて

攻め上り天下を取るつもりであったという。秀吉が、官兵衛の心を見抜いた通りであった。

再来年の大河ドラマの主人公真田幸村は、大坂の陣の時、軍師として進言するも、淀君はじめ重臣に聞き入れてもらえなかった。聴く耳を持たなかった淀君たちに非もあるうが、どうしたら受け入れてもらえるか。官兵衛も信長、秀吉に直言して三度謹慎させられてはいるが、軍師の役を全うし勝利に導いた。幸村も軍略家ではあるが、政治的手腕が足りなかったのかも。

信頼出来る参謀、腹臣を持つこと。

肩書を望んだり、あわよくばトップの座を狙う者を近臣として全幅の信頼をおくと裏切られることがある。

しかしその一方で、「俺の言うことを聞け」と、裏の仕事をさせたり、大切にしないと、トップの悪い面も総て把握しているだけに、しつぺ返しされないとも限らない。「秘書にやられた」ということのないよう、信頼関係を築いて下さい。

参考文献：「名将名言録」火坂雅志編 角川学芸出版・「人物逸話辞典」上 森銚三編 東京都出版



竹中半兵衛